



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.114
2013.3.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器

— 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 —

塚本師也

第6回 阿玉台式土器の研究史(4)

阿玉台式土器は、角押文や爪形文などの竹管状工具の押し引きによる文様を特徴とするが、その施文具と施文技法の分析が行われた。篠原正は、千葉県新橋遺跡の報告書において、施文具と施文方法およびその結果表出される文様との関係を明らかにした(篠原1978)。施文具として円形竹管と3種10種類の先端部形状の異なる半截竹管を復原した。また、体部にみられる刻目文は、ハマグリ等の貝殻腹縁が施文具であることを明らかにした。大村裕は、勝坂式最古段階や阿玉台式にみられる「角押文」「キャタピラー文」について、施文具と施文方法を復原し、前者が円形もしくは半截竹管を「押し引き」し、後者が、多截竹管を「連続押圧」したことを明らかにした(大村1984)。

西村正衛の阿玉台式土器の細分が普及し、以後は編年や細分に正面から取り組んだ研究は少なくなる。出現期(土肥1981、谷井1982、塚本1990、大村1995)、終末期(下総考古学研究会1998、江原2006)および並行する土

器との関係(寺内1987、谷井1985、塚本1990、山口1991、塚本2003)を取り上げた論考が目立つ。あるいは更なる細別(大村1991等)が行われる。

1980年代以降、数多くの論考があるが、その全てに触れることはできない。研究史の最後に、四半世紀以上続く小林謙一の勝坂式土器と阿玉台式土器の研究を取り上げる。小林は編年表の完成を目的とするのではなく、分布、土器に見られる地域間の交流、そして文化圏としての実態を探るための基礎研究として土器を分析する。論考も、セトルメント・システム(小林1988)、漁網錘(小林1989)、竪穴住居(小林1990)に及び。東関東地方から中部高地の勝坂式、阿玉台式の成立期の土器を取り上げ、A～Eの5群の土器を抽出した。このうちA群(阿玉台式土器)、B群(勝坂式土器)に対して、文様要素(施文具と施文方法)、口縁部文様区画、文様帯構成について、変化の方向性を踏まえて分類した。それぞれを組合せて、集成した土器の個体数を表、グラフにし、変化の方向の妥当

性を確認した。そして、最も差異が明確で、細片でも識別できる文様要素によって時期を設定した。この時期を、竪穴住居跡での出土状況等で検証した。更に、A～E群のそれぞれの分布を把握し、4つの地域(霞ヶ浦～東京湾東北部沿岸、諏訪湖周辺・ハケ岳南麓～甲府盆地、東京湾北～西部湾岸、多摩丘陵)を設定して、それぞれにおける土器様相を示した(小林1984)。文様要素を時期設定の指標として重視しながらも、これと口縁部文様区画、文様帯構成との組み合わせによって変化を捉えた点、更に阿玉台式土器を勝坂式土器と同一基準で分析した点など、従来とは異なる分析視点がみられた。その後、地域毎に成立期の土器様相に論究する。阿玉台式土器では大宮台地の土器を取り上げる(小林1994)。近年では、阿玉台式と勝坂式の折衷土器を取り上げ、文様要素、文様帯構成、文様区画を観察し、土器制作者の専門性や出自、土器の移動現象等を復原し、土器型式分布圏間のさまざまなレベルの交流を検討した(小林2011)。

【参考文献】

- 江原英、2006、「阿玉台式の伝統と「中峠0地点型」の成立(覚書)―寺野東遺跡と島田遺跡出土土器の観察から―」『栃木県考古学会誌』27集、栃木県考古学会
- 大村裕、1984、「いわゆる「角押文」と「キャタピラー文」の違いについて」『下総考古学』7、下総考古学研究会
- 大村裕、1991、「型式細分に関する一つの試み―埼玉県飯能市・堂前遺跡第2次調査1号住居址出土土器の分析を中心に―」『下総考古学』12、下総考古学研究会
- 大村裕、1995、「阿玉台式土器成立の指標に何を求めるか?―西村正衛氏による阿玉台式土器の研究に学ぶ―」『土曜考古』19、土曜考古学研究会
- 小林謙一、1984、「中部・関東地方における勝坂・阿玉台式土器成立期の様相」『神奈川考古』19、神奈川考古同人会
- 小林謙一、1988、「縄文時代中期勝坂式・阿玉台式土器成立期におけるセトルメント・システムの分析―地域文化成立過程の考古学的研究―」『神奈川考古』24、神奈川考古同人会
- 小林謙一、1989、「縄文時代中期前葉段階の土器片鏝にみる生業活動―地域文化成立過程の考古学的研究―」『古代文化』第41巻1号、古代文化協会
- 小林謙一、1990、「縄文時代中期勝坂式・阿玉台式土器成立期における竪穴住居の分析―地域文化成立過程の考古学的研究―」『信濃』第42巻第10号、信濃史学会
- 小林謙一、1994、「大宮台地周辺における阿玉台式土器成立期の土器様相」『土曜考古』18、土曜考古学研究会
- 小林謙一、2011、「土器の折衷―勝坂式と阿玉台式―」『異系統土器の出会い』同成社
- 篠原正、1978、「新橋遺跡における阿玉台式土器の竹管文と施文具の研究」『千葉県印旛郡富里村 新橋遺跡発掘調査報告』富里村教育委員会
- 下総考古学研究会、1998、「下総考古学15 <特集 中峠式土器の再検討>」
- 土肥孝、1981、「阿玉台式以前の土器―五領ヶ台式と阿玉台式の間―」『土曜考古』4、土曜考古学研究会
- 谷井彪、1982、「いわゆる阿玉台式土器とその周辺の土器群について」『土曜考古』6、土曜考古学研究会
- 谷井彪、1985、「阿玉台式から見た東北南部大木式の変遷」『古代』第80号、早稲田大学考古学会
- 寺内隆夫、1987、「勝坂式土器成立期に見られる差異の顕在化―隣接型式との関係阿玉台式土器その1―」『下総考古学』9、下総考古学研究会
- 塚本師也、1990、「北関東・南東北における中期前半の土器様相―縄文地に有節沈線を施文する土器群について―」『古代』第89号、早稲田大学考古学会
- 塚本師也、1990、「坊山遺跡出土の阿玉台式土器(後編)」『栃木県考古学会誌』12集、栃木県考古学会
- 塚本師也、2003、「茨城県北部に於ける縄文時代中期中葉の土器の一様相―宮後遺跡の調査成果から―」『領域の研究』阿久津久先生遺稿記念事業実行委員会
- 山口逸弘、1991、「「新巻類型」と「焼町類型」の文様構成」『土曜考古』16、土曜考古学研究会

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■阿玉台式土器	阿玉台式土器の研究史(4)	塚本師也 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第107回)	山根 航…2
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて(第8回)	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	『考古学―理論・方法・実践―』	小野寿美子…3

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第8回)

渡辺 誠

9. 早水台遺跡発掘の参加

先に記した修士論文・抜歯風習の研究を提出すると、すぐに夜行寝台に乗って九州へ向い、大分県早水台移籍の発掘に参加した。1964年2月である。当時は前期旧石器問題が盛んで、いわゆる石英石器?に関心が集中していた。私自身は旧石器時代にはあまり関心はなかったし、北京の周口店遺跡の石器は緑色砂岩であることも、読んで知っていた。それでも参加したのは、江坂先生のお手伝いをしながら視野を広げるためであり、抜歯風習研究の資料をもっと知りたい、そして装飾古墳・方形周口墓にも関心を持っていたからである。しかし知りたくないことまで知ることもなった。もっともまったく無関心であったわけではなく、細石核の実測を佐賀県で行った名残が、今でも数枚手元に残ってはいる。

この時の先生方は宿舎の大部屋を二つぶち抜いており、二つに分かれて火鉢にあたっていた。江坂先生は賀川光夫・芹沢長介先生と一緒にであり、他は金関丈夫・国分直一・藤田等先生達がおられた。金関先生達には抜歯風習には抜歯風習について沢山御教示を頂いていたし、もっといろいろ教えていただきたいので、そちらの火鉢に混ぜて頂くことあった。特に金関先生は、原稿用紙の裏側にびっしりといろいろなことを書いて送って下さったこともあった。年下のものにも優しく対応すべきことを教えられたように思い、不十分ながら私も実行している。

しかし二つのグループの間にははっきりしないものがあるらしく、私はいい顔をされないうでいた。しかし台湾に永くおられ、抜歯風習をはじめ山地民族に詳しい金関・国分両先生には、まだまだ教え頂きたいことがあったのである。また朝はいつも現場まで、藤田先生と歩いて行った。

そして私の担当のグリッドで、最下層の地山のなかに沢山含まれている石英のなかに、少しピック状になっているものがみつき江坂先生に知らせたところ、すぐに芹沢先生も来た。しかし1点ではということになったが、約2

時間後さらに下のグリッドでも見つき、これで決まりとなった。しかし2番目の石英石器?を発見した学生とは、広げた新聞紙に山積みになった石英のなかから、たった2点だけが出世したんだね、と話し合ったものである。しかし今その学生の名前が分からない。別府大学の坂田邦洋君とばかり記憶していたが、数年前にあった時に確認したいと思ったところ、自分ではないと言われた。

名前と言え、報告書の参加者名簿の中には私の名前はない。これらのことについて賀川先生は、あの石器を見つけたのは君だから、ちゃんと書いて名誉回復をあげるからねと言われた。これで少し胸のつかえがおりたのである。

1967年8月には古代学教会による同じ大分県下の、坂ノ市町丹生遺跡の発掘に参加した。この時は江坂先生の代理であった。角田文衛先生より江谷 寛先生をご紹介頂いたが、後日古代学協会に勤めることになり、同先生には大変お世話になることになった。

この帰りに別府大学へ賀川先生をお訪ねしたところ、そんなに九州に来たいなら、他に頼まず私のところへ来なさいと言って下さった。その前年やはり大分県緒方町の大石遺跡の発掘に参加させて頂いたが、この直後には荻町桜山遺跡にも参加させて頂いた。邪馬溪町のへぎ洞窟にも参加させて頂いた。お蔭で親父に会うかのようになり、頻りに九州へ出かける基礎を作って頂いたばかりでなく、助教授の橘 昌信氏はじめ同大学の学生諸君とも親しくなり、卒業後各地に就職した諸君とも交流を深めていった。そのなかでも山崎純男氏は特別であった。

隔月連載です。
次回は石井則孝先生です。

略歴	
昭和13年11月18日	福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月	福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月	慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月	同上大学院博士課程修了
昭和43年4月	古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月	名古屋大学文学部助教授
平成元年4月	同上教授
平成14年3月	同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月	山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月	日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

Jレーエッセイ

マイ・フェイス・サイト 107

鳥坂寺跡 ~ 大阪府柏原市

山根 航

柏原市は、大阪府の南東部、奈良県との府県境に位置しています。大阪の中心部と名古屋・伊勢方面を結ぶ近鉄大阪線が通る市内には、安堂駅という駅があります。近鉄大阪難波駅を出て、約40分ほどで到着するこの駅から、次の河内国分駅へ向かう途中、森とぶどう畑に挟まれ

た切り通しを一瞬通過します。遡ること約1300年前、西側の雑木林には三重塔、東側のぶどう畑には立派な金堂と講堂がそびえ建っていました。柏原市内にある「河内六寺」(かわちろくじ)の一つ、「鳥坂寺」(とさかでら)です。

『続日本紀』に、756年2月、孝謙天皇が平城宮から難

波宮へ行幸する際、「智識、山下、大里、三宅、家原、鳥坂」の六つの寺を参拝したと記されています。これらを総称して「河内六寺」と呼んでいますが、鳥坂寺はその中で唯一、塔・金堂・講堂などの伽藍配置が、発掘調査で確認されている寺院で、創建は、7世紀後半頃と考えられています。

舌状に延びる狭い尾根上に立地していたこの寺院は、1925・26年にかけての大軌電車桜井線（現 近鉄大阪線）敷設工事により、東西に分断されてしまいました。1929年、ぶどう畑から見つかった鴟尾により全国的に知られる寺院となり、この鴟尾は、現在復原され、東京国立博物館に展示されています。

1961・62年の柏原中学校、大阪府教育委員会、奈良文化財研究所による発掘調査で、塔・金堂・講堂の位置や規模などが確認されました。特に注目されるのは凝灰岩製の金堂基壇で、4段分残っていた北側階段は、古代建築の上で重要な資料となっています。

その後、柏原市教育委員会によって調査が進められ、1983・84年には、「僧房」・「食堂」とみられる建物跡、さらに「食堂」に近い井戸の中から「鳥坂寺」墨書土器も見付き、考古資料からも、この寺院が鳥坂寺であることが確認されました。また北東斜面には、同時代の建物群が広がっていたこともわかっています。この集落で暮らしていた人々が、鳥坂寺の建立に携わっていたのでしょう。

2009・10年、柏原市教育委員会は、国史跡への指定を目指し再調査を行うこととなり、私もこの調査に携わることになりました。半世紀ぶりに姿を現した金堂北階段の迫力は、とても強く印象に残っています。金堂南側では、広範囲に盛土が見つかり、おそらく「中門」を建てるための大規模な造成と考えられます。また狭い尾根上のため、無いと思われていた「回廊」も発見されるなど、寺院のより具体的な景観がわかってきました。

そして2012年1月24日、市内4件目の国の史跡として指定され、さらに同年の7～9月には、柏原市立歴史資料館の夏季企画展『鳥坂寺再興』が開催されました。発掘調査担当者ということで、展示構成や、図録などに臨んだのですが、はじめての展示担当ということもあり、なかなか思うようにできなかったのを覚えています。ただ、



▲鳥坂寺跡の伽藍配置



▲金堂北階段の再調査

発掘調査にも参加した市民歴史クラブ製作による1/30スケールの伽藍模型、実物大の鴟尾のレプリカは、一般の方々非常に好評でした。会期中の9月1日、「鳥坂寺」墨書土器が市の文化財として指定されるなど、盛り上がりを見せている鳥坂寺跡は、現在、公園化を視野に整備計画が進められています。

調査当時、この寺院の「重み」をあまり感じることなく調査していましたが、市内に多数ある古代寺院のなかでも、これほど情報量のある寺院は少なく、河内六寺の性格、ひいては古代の河内を考える上で、「軸足」となる遺跡といっても過言ではありません。研究者だけでなく、将来、広く市民に活用される史跡になることが期待されます。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは大矢祐司さんです。

考古学者の書棚

「考古学 — 理論・方法・実践 —」

コリン・レンフリー、ポール・バーン（監修・訳者：池田裕・常木晃・三宅裕）（訳者：松本建速・前田修）

／東洋書林(2007)

小野 寿美子

今回は、『考古学 — 理論・方法・実践 —』を紹介していきます。本書の構成は、以下の通りです。

Preface はじめに

Introduction 序章—考古学の特質と目的

PART I The Framework of Archaeology

第I部 — 考古学の枠組み

- 1 The Searchers 研究者たち — 考古学の歴史
- 2 What is Left? 何が残されたのか — 多様な資料
- 3 Where? どこに — 遺跡と遺構の踏査と発掘
- 4 When? いつ — 年代測定法と編年

PARTII Discovering the Variety of Human Experience**第II部 — 人類の様々な経験を発見する**

- 5 How Were Societies Organized?
どのように社会は組織されたのか — 社会考古学
- 6 What Was the Environment?
環境とは何であったか — 境考古学
- 7 What Did They Eat?
人は何を食べていたのか — 生業と食性
- 8 How Did They Make and Use Tools?
人はどのように道具を作り使ったのか — 技術
- 9 What Contact Did They Have?
人はどのように交流していたのか — 交易と交換
- 10 What Did They Think?
人は何を考えたか — 認知考古学・芸術・宗教
- 11 Who Where They? What Where They Like?
人とは何者でどのような存在だったのか
— 人の考古学
- 12 Why Did Things Change?
物事はなぜ変化したのか — 考古学における説明

PARTIII The World of Archeology**第III部 — 考古学の世界**

- 13 Archaeology in Action
考古学の実践 — 5つのケース・スタディ
- 14 Whose Past?
過去は誰のものか — 考古学と社会

興味深い内容が充実している本書ですが、この中でも「14 Whose Past? 過去は誰のものか — 考古学と社会」を中心に紹介していきたいと思います。本章の内容は、現在日本でパブリック・アーケオロジージあるいは、パブリック考古学と言われているものです。

パブリック・アーケオロジージは、1972年にマックギムジー (McGimsey) によって、アメリカにおける考古学のための法整備や保護の概念を広めるために提唱されました。また、ピーター・アコ (Peter Ucko) は、考古学という学問を誰もが参加できるものにする、そして考古学者に彼らの研究テーマが偏狭なものであって、学問的ではあっても社会的でないということを理解させる必要があることを説いています。このような背景をもちつつ、海外でパブリック・アーケオロジージは盛んに実践されて

いるのです。

近年、考古学と現代社会との関係を考察するパブリック・アーケオロジージが日本で紹介されるようになってきました。しかし、海外で積極的に取り組まれているパブリック・アーケオロジージについて書かれた書物は、現在においても翻訳されることはほとんどありません。その中でも本書は、初めて日本語で触れられたものであり、海外で積極的に取り組まれているパブリック・アーケオロジージについて紹介された点において、画期的であったと思われます。

1970年代に米英で成立したパブリック・アーケオロジージには、「市民のために」と「市民と共に」という両方の意識が必要と考えられています。日本で従来行なわれてきた博物館などでの教育普及活動は、パブリック・アーケオロジージの一部ではありますが、「市民のために」という意識が強かったことは否めないと思われます。今後は、「市民と共に」という意識を備えつつ、教育普及活動を続けていく段階に入ってきているといえるのではないのでしょうか。

また日本では、遺跡の公開や整備、遺物の展示といった「考古資料の活用」にパブリック・アーケオロジージの概念を導入する事例も出てきています。しかし、海外の理論をそのまま援用するだけでは、これまで教育普及活動などで培ってきたものが理解されないまま、言葉だけが先行してしまう可能性もあります。日本の中でその意味を咀嚼・理論化し体系化していくことが求められます。

前号で執筆されている五十嵐さんとともに筆者は、香川県小豆郡土庄町豊島において、パブリック・アーケオロジージの実践を続けています。(五十嵐聡江・小野寿美子 2009「パブリック・アーケオロジージの実践に向けて—香川県小豆郡土庄町豊島を事例として」『筑波大学 先史学・考古学研究』第20号／2012「パブリック・アーケオロジージの可能性」『筑波大学 先史学・考古学研究』第23号) まだまだ理論化し体系化に至るには時間がかかると思いますが、私達のケース・スタディをもとに日本におけるパブリック・アーケオロジージの発展に寄与出来ればと考えています。賛否両論あると思いますので、みなさまのご意見をいただければ幸いです。

この本の紹介によって、改めてパブリック・アーケオロジージが認識され、より多くの人々に浸透することを願っています。

アルカ通信 No.114

発行日 2013年3月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所 (株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp